演 題 名	母牛品種の違いが黒毛和種子牛の増体に与える影響		
発 表 者 氏　　名	常田将宏	所　属	畜産試験場

【はじめに】

子牛市場において、黒毛和種子牛（和子牛）の増体は血統とともに価格を決める重要な要素である。近年、国内外の情勢変化に伴い、子牛価格は下落傾向にあり、確実に増体のよい子牛を出荷することが求められている。

本研究では当場の黒毛和種及び交雑種レシピエントが分娩した和子牛を自然哺乳にて育成し、生時体重、増体、哺乳量を中心に調査を行い、母牛品種の違いが与える影響を検証するとともに、増体に関連する要因を調査した。

【材料及び方法】

過去６年間に当場にて生まれ、子牛市場に上場された和子牛の生時体重と上場時に測定した体重から求められる日増体量との関連を調査した。なお、この場合の日増体量は「（市場上場時測定体重-生時体重）/日齢」とした。

黒毛和種及び交雑種レシピエントによる和子牛分娩後、自然哺乳により哺育育成させ、和子牛の 15 日齢、45 日齢、75 日齢時の哺乳量を測定、さらに 30 日齢、60 日齢、90 日齢、105 日齢時に体測を行い、生時体重、哺乳量及び日増体量との関連を調査した。

【結　　果】

（１）母牛（レシピエントの場合を含む）が黒毛和種であり、自然哺乳の後、市場に上場した和子牛 59 頭の生時体重と日増体量には相関がなかった。一方、母牛が交雑種（レシピエント）であり、自然哺乳された和子牛 17 頭の生時体重と日増体量は正の相関があった。

（２）母牛交雑種和子牛は、母牛黒毛和種和子牛と比較して、生時体重は変わらなかったが、15 日齢時点で体重が有意に増加し、105 日齢の離乳時点で約 22kg の差があった。日増体量は 60 日齢まで母牛交雑種和子牛が多かった。

（３）母牛黒毛和種に比べ、母牛交雑種の和子牛は、哺乳量が多かった。母牛黒毛和種では 15 日齢、45 日齢、母牛交雑種では 45 日齢、75 日齢で哺乳量と日増体量に相関があった。

（４）母牛黒毛和種では、離乳までの期間で和子牛の生時体重と日増体量に相関がなかった一方、母牛交雑種では正の相関があった。

【考　　察】

母牛が交雑種の和子牛を自然哺乳にて育成した場合、母牛が黒毛和種の場合と比較して、哺乳量は多く、高増体の子牛が育成できた。また、日増体量は哺乳量のみならず、生時体重とも相関することが確認された。このことから、交雑種レシピエントによる和子牛生産のみならず、強化哺乳プログラムを用いた人工哺乳においても、生時体重の大きくなる精液の利用や飼養管理、サイズの大きい和子牛の分娩に耐えるフレームの大きい母牛の選抜により、効率のよい和子牛生産が可能であると考えられた。